

●この十二年つくりし輪こそひこばゆる

新野祐子

ひこばゆる。動や下二、孫（ひこ）生ゆから、という。漢字、蘂（ひこばえ）もつかわれる。（晩春の季語。蘂で、こんな例句がある。蘂や涙に古き涙はなし（中村草田男）

この十二年、は東日本大震災からの経過年。つくりし輪、とは有機農業者つどう（前句）とあるところから、その人たちの結びつきか。それでひこばゆる、で継承されていることが強調された。タイトル「フクシマ再訪」なので、全体がやや報告のかたち。

不耕起説くミミズ博士の自然体

いろいろキーになることばがある。不耕起はアクチュアルな話題でもあるが（じぶんはさいきんした）、ミミズ博士の方は検索すると「生きている土」という言葉とセットになっていた。ここには、過去と未来を含む現在がある。

帰還困難区域よりノスリの巣立ちかな

雲雀揚がらぬ田んぼは除染の轍のみ

●数人がウインドブレーカーを着て歩くのみなり霞城公園

布宮慈子

一連タイトルは「早春の水」。歌で、城跡の土手に、梅園と呼ぶほどはなき梅の木、思い切って出てきて城址公園、と順に触れられているように、四首目のこの歌で、霞城公園と名称がだが、その往来に伴って、詠われた歌で一連になっている。フキノトウまた白梅。季節は早春で、ウインドブレーカーでよいほどの気温なのだろう。数人が、という入り方がいい。歩いている人を見るのみ、という。情景が浮かぶ。ウインドブレーカーのカタカナと霞城公園の名称のもつやや重さ（歴史性）。

水は、お濠、淵の水（八、九、十首目）。往路があれば復路がある。反復するものも。

三年の記憶とふものあやふやに疲れ果てたるマスクがひとつ
いろいろ重ねてみるができる下句。おもうものがある。

冬の日にお濠の土手に飛んできし翡翠の色おもひて歩く

●見るかぎり雲一つなく冬の陽はわが生日の頭上を照らす

市川茂子

見るかぎり雲一つなく。関東では冬によくそんな日がある。町中では空を邪魔するものがあり、そんなことでも、見るかぎり、である。生日は（せいじつ、と読んで）変換した。誕生日のこと。歌は一人（自己）祝福でもあるようだ。改まった感じがある。

古き家解体されて新築の立て看板を見つつ通りぬ

通りにある変化の一つ。ここでは古き家と新築。立て看板にもよるが、分譲（売り家）ということとかもしれない。古き家が解体されてそこに新築の家が建つ。そういうことはあることだが、一通りの関心をひく。見つつ通りぬ、はじぶんの年齢からその関心のありようがわかるような気がする。ところで、一日は天気そのもので、ながい籠もり居もあつて、天気予報は大きなものになった。この歌の寒波は記憶にあるようだ。

十年に一度の寒波とう予報その夜は風をともないて冷ゆ

前号作品短評B 〈慈子〉

●いつに見し雲一つ無き青空か僥倖のごと弥生の空晴る

梅津純子

雪国に住んでいる人なら、この感覚、この喜びを経験していることだろう。それほど春先に見る青空はうれしく、尊いものに思えるのだ。したがって「僥倖」という一見大げさな比喻も素直に受けいれられる表現である。

次の歌集編まむと既に幾年かフクシマ辺野古ウクライナ続く

歌集にはただごと歌も必要とふ亡き師の言葉をりをり甦る

第二歌集を出そうと何年も前から考えている作者。その間にも、福島第一の原発事故や沖縄の辺野古沖の埋め立て、ウクライナでの争いと「ただごとならぬこと」が起きている。しかし、亡き恩師の言葉も忘れてはいない。「甦る」は「かへる」と読ませるか。

とことこと歩き始めた小さき人わが知らぬ世を生きゆく背よ

最終に置かれた歌。コロナ禍に生まれた孫は一歳半になっていて、このたび初めて会ったのだ。

「背」は「そびら」と読む。自分の人生に照らして孫を見つめる、心に迫る歌である。

●初めての一月開始の手帳繰る四月以降の白さまぶしく

大橋千佳子

一月から始まる手帳を初めて使うのだという。今までは四月始まりの手帳で、予定はぎつしりだったのだろう。ことしは四月からのページが空白。決まった予定がない寂しさも少しはあるが、自分で決めていけることがうれしい。そう受け取れる。

「いい人」のレットレルもらい自分から剝がす勇気もなく退職す

神妙を飛び越え友は「平日に遊べる人が増えて嬉しい」

作者は長いあいだ教職にあったようだ。決断して退職はしたものの、その後の気持ちの揺れを丁寧に表現している。退職という一大事を友人に報告すると、神妙に聞いてくれると思ったら、平日一緒に過ごせることを喜んでいる様子。肩透かしを食ったようでもあるが、あれこれ複雑な思いを抱えているのは自分だけなのだ、友の現実的な反応を肯定している。人生の中の変化を徐々に受けいれようとする作者像が見える。

●老年は犬にもありて残生はわずかなるかやあわれさに似る

小野澤繁雄

犬も老いる。特に最近のペットは栄養状態がいいから長生きするらしい。見かけた犬はかなり老

いていて、残された生はわずかだろうと思われるが、かわいそうなくらいだ。当然、老犬の様子を人の生、または自分の人生に重ね合わせており、しみじみとした歌となっている。

バス停にきてしる読みの向台生むこうたいきてこのよの解のひとつか

バス停で「むこうだい」という読み方を知るということは、この世の数ある疑問に対する解答の一つだろうか。向台というのはよく見かける地名だ。取り立てて意味があるとも思えないのだが、此岸や彼岸などと考え合わせると、また違った趣の歌になるだろう。次もちよつと面白い歌。風車は「かざぐるま」と読ませるか。

ちぎれんがごとくに風に風車鳥除けの鳥みることもなく